

講演会

「冒険小説への誘い～イングラム・コレクションの楽しみ～」

平成 15 年 9 月 27 日 (土)

国際子ども図書館客員調査員・青山大学名誉教授

神宮 輝夫氏

ご紹介に預かりました神宮輝夫です。長いこと教鞭をとったりしましたが、ろくろく勉強もせずに現在に至っておりますので、あまりよい話も申し上げられないかもしれませんが、お付き合い下さい。

イングラム・コレクション(以下コレクション)は、こちらの図書館に 1,157 点、所蔵されております。殊に冒険小説につきましては、図録が出ております。図録は、薄い感じですが、写真などがたくさん入っており、かなりコンパクトに資料が詰まっています。千円です。決して高くはないと思います。お持ちになっておきますと、読書の楽しみ、研究の資料になること請け合いです。それを最初に紹介してお話を始めます。

冒険小説は、『ロビンソン・クルーソー』が 1719 年にイギリスで出たときから始まっていることは、定説になっています。図録にはコレクションに所蔵されている 1 冊の表紙が出ております。確か 3 冊、入っていたと思います。ただ『ロビンソン・クルーソー』という小説は出てから数年ならずして子どもの本棚に移ったような本ですので、いろいろな版があります。私は、一度、原書と短くされた子どものための本の比較をしるとの依頼で、ある紹介の記事を書いて、このくらい違うのだと比べてみました。ところが後で原書と称する物を調べてみたら、それもちゃんと短くなっている版で恥ずかしい思いをしたことがあります。『ロビンソン・クルーソー』をお読みになるときには、まず一番確かなもので短くされていないものからお読みになる必要があるのではないか、あるいは自分の手に入ったものが本当に完全なものかどうかをお確かめになる必要があるのではないかと思います。かなり詳しく書いてあるものでも、省略されているものが非常に多いですね。ですからその辺は、かなり危ないところがある本だと思います。『ロビンソン・クルーソー』という本は、先程申し上げたように数年ならずして子どもの本棚に移り、そしていろいろな形で縮刷版が出て、ずっと現在に至るまで楽しまれております。子どもは、本の冒険の部分を楽しんで読みます。確かにこの本は、冒険小説のお手本になるだけの本質を持っております。まず非常に読みやすいということです。明快な文章で書いてありますし、日記であるとか表であるとか、わかりやすいものをたくさん使っております。例えば、原住民が押し寄せ

てくると、鉄砲で殺すわけですが、森の中で何人、岸辺で何人そしてカヌーの中で何人と、まるで商人が自分の売掛帖を書いたみたいに丹念に書いてあるところがあります。それから日記がよく使われています。つまりわかりやすいという条件がまず一つあります。それから難破して一人で無人島で生活を組み立てていく中で、様々な発見をしていきます。色々な物を島で手に入れます、難破した船からもかなり物を陸揚げして、生活を組み立てていく。人間には本能的に物を獲得したり、発見したりする喜びがあります。そういった本能は、子どもは大人よりももっと強いわけですから、それもやはり子どもを刺激していくだけの力を持っています。その他、冒険の場合でもスリルとサスペンスを至る所にはめ込んで、読者を楽しませています。

代表的なのは、「砂の上の足跡」の場面です。誰もいないと思っていた島にある時、一つだけ足跡が見つかる。点・点・点とあるのではなくて、一つだけあるのです。それを自分の足に当ててみると自分の足よりも大きい。つまり無人島ではなくて、誰かが来たという証拠であるわけです。彼は恐怖して、三日三晩、洞穴の中に入ってじっと息を潜めている場面があります。そういったところの不安感が実にうまく書いてある。そうした場面が随所にはめ込まれていて飽かせない。デフォーの後でイミテーションを作った人たちは、それらをうまく使って新しいものを作っています。子どもは、そうした冒険小説のおもしろさを発見して読んだわけですが、大人がそれを子ども向きに直した場合に、最初はどうか冒険よりもあれをお説教の本として使った、あるいは与えようとした気配が非常に濃厚です。

代表的なものには、ヨアヒム・ハイリヒ・カンペ(Joachim Heinrich Campe)という人の本があります。1779年でしたか、だいたい後になって、ドイツ人のヨアヒム・ハイリヒ・カンペ人が書き直して子どもの本にしているわけです。その時にカンペは、子どもたちを毎日、松の木の下に座らせて、一日に一章あるいはもう少しとか、とにかく自分で書き直した『ロビンソン・クルーソー』の話を聞かせるという形で『新ロビンソン・クルーソー』を出したわけです。カンペは、前書きに娯楽と教訓を結びつけること、事実である有益な知識を伝達すること、博物誌的な様々な要素を教えること、価値、美德、信仰の念を深めること、そして大人になってから求められる生活的な様々な要求に耐えられるように、若者を鍛錬することを主眼にして書き直しているのです。つまりこれ、お説教の本ですよ。おもしろい本であるよりむしろ『ロビンソン・クルーソー』を使って、価値観、美德、信仰の念、謙虚な心を養うこと、natural history と当時と言っていた自然科学的な有益な知識を与えること、それを冒険という娯楽的要素と一緒にして子どもたちに与えるためにその本を書いたわけです。この本はヨーロッパでは大変によく読まれて、最初ドイツ語で書かれたのが、フランス語になりそれから英訳本が出て、19世紀を通じて、ずっと読まれていた形跡があります。この本は、18世紀の後半に出た教訓の本の一冊だったと考えればよろしいかと思います。ですから『ロビンソン・クルーソー』から始まった冒険小説と言いながら、その冒険小説の開祖が子どもに手渡されるまでには教訓主義的なものに化けてい

るということがあるわけなのです。イギリスで非常に盛んに読まれ、やがてヨーロッパにも広がっていった18世紀初めの『ロビンソン・クルーソー』とそれ以後の冒険小説の基本的なところには、自然科学的な知識の伝達、倫理、道徳、美德、正しい価値観の養成、心身の鍛練といったようなことが、テーマとして基本にあったのではないかという気がします。大人が子どもに本を書いて与える場合、冒険小説に限らず有益な知識とか倫理道徳とかと言ったものを伝えようというする気持ちは、当たり前の話です。大人が子どもに向かって書く場合に、その作者の思想、考え方が伝わらない本というのはないわけで、作者の顔がない本というのは、これは本にならないのではないかと思います。早く言えば、教訓と子どもの本というのは、玉ねぎとカレーみたいにいつでもくっついて歩いているものだという気がします。ただ教訓の与え方が常に問題になるのでしょうか。やはり児童文学には教訓書があるものだという事を私たちは認識していた方がよろしいのではないかと思います。教訓があるから悪い本ではなくて、教訓がないから悪い本だと言った方がいいくらい、今でも子どもを楽しませるためだけに書いた本の場合には、あまり教訓がないもの、全然教訓が感じられないものがあったりする。つまりそれは、ある意味においては大人の責任を放棄したと考えてもいいのではないかと、私などは考えています。

イギリスで初めて生まれた子どものための冒険小説は、1841年にキャプテン・フレデリック・マリアット(Captain Frederick Marryat)という人が**Masterman Ready**『老水夫マスターマン・レディ』です。これは、子どもの要求を受けて書いたもので『ロビンソン・クルーソー』の子ども版と言えいいようなものです。これはシーグレーブズ一家の無人島物語です。マスターマン・レディという名前の非常にベテランの水夫が一人、この家族についています。老水夫は、様々な知識を持っているので、一家が無人島で生活を築いていく非常に強力なアドバイザーでありヘルパーになっていきます。この話を読んでいくと、冒険小説というよりもむしろ理想の子ども、少年とは何かという18世紀的な教訓小説の一つではなからうかという気が非常に強くします。ウィリアムとトミーという子どもがいます。二人は兄弟で、兄のウィリアムは、目上の人の言うことを実によく聞いてそしてその指示に従いながら暮らしていく良い子で、トミーは奔放なやんちゃ坊主であり目上の人、ことにマスターマン・レディの言うことなどもあまり聞かない。つまり良い子と悪い子に対比させ、結局は無人島生活の中でどちらが望ましい子どもであるかってことがわかってくるようになっていきます。冒険よりそっちの方に主眼があるのではないかという気がするのです。しかし、もちろん『ロビンソン・クルーソー』を下敷きにしていますから、冒険的な要素もたくさんあって、その部分はかなりおもしろいのです。そして、かなり深刻なところもあります。例えば、大きな水瓶に毎日誰かが水を一杯にしておくという取り決めがあります。その当番に弟が当たった時に、水がまだ、たくさんあるので今日はいいかと思っさぼるわけです。ところがその日に原住民に襲われて、家が取り囲まれて水を汲みに行けなくなって、すぐに水が枯渇してしまうのです。飲料水がなくなってしまふ。そこでマスターマン・レディという老水夫が自分で汲みに行くと、結局は、原住民の矢に当た

って死んでしまいます。義務を怠ったことが一人の大事な人間の生命に関係してくる非常に深刻なエピソードです。こういうところは、さすがに読んで迫力があります。トミーという子どもは、結局最後はイギリスの陸軍に入るわけですが、あまり紳士階級としては、よい末路ではないわけなのです。早く言えば、お説教小説の伝統を持つ冒険小説です。少年は、思慮が深くて長上の言うことに従順で、成長の過程で生活技術や必要な知識を身に付け、自分の智恵を磨いていくべきであるというのが 19 世紀前半のイギリスで求められていた理想の少年像ではなかろうかという気がします。これは純粋に冒険小説という範疇にはどうも入らないのではないかという気がします。そしてこれが最初の冒険小説であるということを考えますと、イギリスの子どものための冒険小説の初めには、早く言えば人種差別であるとか侵略戦争であるとかそういった意識は、あまりなかったのではないかという気がします。そして、この作品に見られるような優れた人格形成、成長の物語としての要素は 19 世紀の冒険小説の中に一貫して流れていたような気が致します。

この話よりももう少し後になってウィリアム・ヘンリー・ジャイルズ・キングストン (William Henry Giles Kingston) という名前が 4 つある人が登場します。金持ちの息子だったらしいです。この人が *Peter the Whaler* 『捕鯨船員ピーター』という作品を 1851 年に書いています。『捕鯨船員ピーター』は、あまり古本がないのです。私もイギリスの古本屋で探してみたのですが、手に入らず、結局、大人向けの Everyman's Library で読みました。日本語では『捕鯨船員ピーター』という講談社版で読みました。おもしろかったです。今はありませんが安い値段でいい本でした。読んでおかれるとよろしいかと思えます。わざわざ原書を見つけて読むほどのものではないように思います。これも一種の教訓小説かなという気がします。牧師の息子のピーターが密猟をしてみつかって、結局は海に逃れるわけです。船員になって海に出る。ところが乗った船の船長に散々な目に会わされて、その船が海賊に拿捕されて、やむを得ず少年は、海賊の手下になって暫く海賊暮らしをする。その海賊船が、アメリカ海軍に拿捕されて、そして彼は、実際に海賊行為をしたわけではありませぬので、アメリカの海軍の水兵になってそれから北太平洋の捕鯨船に乗り込んで、そこで苦勞するわけです。そして非常に優れた青年になって親のところに戻るという話です。これは、何か聖書に関する話でそんなのありましたでしょう。放蕩息子が、家を出て行って、そして乞食のような格好で家に帰って来る。それをお父さんが快く迎えて、良い着物を着せてやって死んだ息子が帰ってきたと言って喜ぶ話がありましたよね。そのパリエーションです。但し、捕鯨とか海賊船とか海軍とか海洋物としてはスリル充分な話です。これはキングストンという人の代表的な傑作とされています。

キングストンという人は、少年向きの雑誌や非常にたくさんの本を出しています。主として海洋物が得意な人で、イギリスの古本屋にはたくさん並んでいます。最近、高価だと思えます。昔は、とても安かったのですが、ひところ日本人とアメリカ人が買うから高くなったのだと言われました。この人は、実に多作な人で、両手両足を使って書いたと言われるくらい非常にたくさんの本を書いた人です。これも先程のマスターマン・レディと

同じ流れ、人格形成の流れ、非常に強い教訓性のある話と考えればいいのです。ですからこの話にも侵略者とか人種差別であるとかイギリスの優越性とか、あることはあるのですが、強調されて前面に出てくるような話ではありませんでした。キングストンという人は、海軍の軍人になりたかったのですが、果たせずに、結局は父親が貿易商で非常にたくさん船を持っていたので、世界中を船で駆け巡ったりします。海の話については、大変おもしろいものが多いと思いますが、1、2冊、読めばわかります。コレクションにも入っておりますので、お読みになれます。

冒険小説には、成長小説あるいは人格形成の小説といった、非常に教訓性の強いというかあるいは子どもの文学の基本的なテーマというか、それから発している一つの特徴があります。2つ目は、有益な知識の伝達です。これは、今でもあるのだらうと思います。そしてこれは18世紀の影響です。18世紀啓蒙主義時代の子ども文学の中には、人間のイマジネーションの働きを極端に排除して事実を尊重する風潮がありました。それも、非常にプラクティカルな日常生活を送るための、あるいは少年が紳士に少女がレイディになっていくための教養・マナー修得が非常に大きなテーマでありました。そのテーマは、19世紀になってもずっと流れていて、冒険小説でも基本的な条件になっていて、これもかなりたくさん作品に見られます。

代表的なものに、時代がちょっと前後しますが、1812年にヨハン・ダヴィッド・ヴィーヌ(Johann David Wyss)というスイスの牧師さんが書いた本があります。この本の英語のタイトルは ***The Swiss Family Robinson*** 『スイスのロビンソン』です。大変によく読まれた本です。最近、子どもの本が非常に多いので、あまり読まれなくなりましたが、少し前まで実によく読まれていました。少年少女児童文学全集には必ずスイス編として、これと『アルプスの少女ハイジ』が一緒になっていました。

私にはこれについて、今でも忘れないエピソードがあります。私は、学生時代に県人会の学生寮に住んでいました。二つ三つ離れた部屋に医学生が住んでいて、国家試験が終わった時に気晴らしに何か本を読みたいが「子どもの本が一番いい」と言って私の部屋に来たのです。それなら「これを読んでみてください」と言って、岩波文庫でこの『スイスのロビンソン』が2分冊で出ていたのを渡しました。夜の10時頃に来たのですが、翌朝、食堂で会ったら真っ赤な目をしていて、「お前は、ひどい本を貸してくれた、夜っぴて読んじゃった」と言うのです。その位、おもしろい。嘘だと思ったら読んでごらんなさい。しかし「あっ、嘘」って言うても知りませんよ、私は。

このおもしろさは、ある意味ではめちゃくちゃなところにあります。この『スイスのロビンソン』は、一家族が南太平洋の孤島に漂着し、『ロビンソン・クルーソー』と同じような生活を一家族で成り立たせていくものです。難破船からいろいろなものを陸揚げする。あんなにもと思うくらいたくさん必要なわけです。ロビンソンは、一人ですけれどこの話には、たくさんの方が登場するのです。そして、この島がまた実に結構な島で、豚が地面を引っかいているので見たら、ジャガイモが出てくる。暫く住んでいると遠くの方で非常

に早く走る何かがあるので見たらダチョウなのです。ダチョウを捕まえて乗り物にします。できるはずないと思いますが。そして森の中に入っていくとアナコンダという大蛇がいます。アナコンダは南米でしょう、ジャガイモも南米です。南海の孤島に存在するはずないのです。ダチョウはアフリカです。ですからその島にはいろいろがめちゃくちゃに入っているわけです。ですから実におもしろい。これも一種の知識の伝達なのです。先程申し上げた『マスターマン・レディ』を書いたマリアットという人は、子どもに「どうい本が読みたい？」と聞いたら、『スイスのロビンソン』みたいな本が読みたいというので、読んで腹を立て、事実即した『ロビンソン・クルーソー』を書くのです。これは本当に事実即してまして、船から豚などを陸揚げするときに豚が沈むと困るのでコルクを豚に巻いてドボンと落とすようなきめ細かな配慮があるので、逆につまらないのです。話の展開を妨げるじゃないですか、そういう細かいことは。ですから『ロビンソン・クルーソー』の亜流としては、つまらないものの代表になっておりますが、そういうふうには読まないで、先程言ったように教訓主義として読むと結構、読みごたえのある本だと思います。

イギリスで 19 世紀に冒険小説が家庭に割合と容易に入っていた原因の一つには、有益な知識の伝達が免罪符になったからです。アメリカへ渡って、メキシコ戦争に従軍したメイ・リード (Mayne Reid) という人がいるのですけれど、この人に **The Rifle Rangers** 『義勇兵たち』という本があります。これは「一将校の北メキシコの冒険」というような副題がついていたと思います。義勇兵になってメキシコ戦争に参戦して、メキシコ軍と戦う一種の戦争物語です。**The Scalp Hunters** 『頭皮のハンター』という続編も書いています。この 2 冊にはメキシコの地勢風土、博物学誌的な知識がたくさん入っていてそれが非常に有益であるという理由で多くの人々に推薦されて家庭に入ってきています。そして後になって調べるとかなりいい加減だということがわかったらしいのです。当時、誰もそれが、いい加減かどうかわからないから O.K. だったわけです。いずれにせよ冒険小説の一つの大きな要素として自然科学的な知識の伝達ということがあったということ、それも頭の中に入れておいて頂けると 19 世紀の冒険小説をある意味で正しく理解できる一つの鍵になっていくのではないかと思います。

本当に正確な知識に基づく冒険小説を発表したのは、ジョージ・マンヴィル・フェン (George Manville Fenn) だったと思います。この人の本もコレクションに 3 冊くらい入っております。マンヴィル・フェンの本は、私たちにはなかなか出会えないので、これはぜひ興味のある方は、イングラム・コレクションの本をお読みになって下さるといいと思います。**Devon boys** 『デボン州の少年』というイギリスを舞台にした小説があります。これもおもしろい小説です。ここにある **Nat the Naturalist** は、イギリスが舞台ではありません。ボルネオやニューギニアを舞台にしています。ですから **Nat the Naturalist** 『博物学者ナット』の副題には「Eastern seas の少年の冒険」と書いてあります。ナットは、ボルネオ・ニューギニア地域に行って、その動植物の研究をするための一員なのです。もちろん、毒蛇が出てきたり様々な猛獣がいたりして、冒険もしなければなりません。しかし、

この人の興味は、おそらく冒険よりもむしろそうした Natural History の方に興味があったのではないと思われるくらいにきちんと調べて書いてあります。もう一つ言えるのは非常に読みやすい、平明な文章だということです。スラスラととても気持ちよく読めて、しかも割合と的確な表現力を持った人で、19 世紀後半の冒険小説作家の中では、特別に異色な素晴らしい作家ではないかと思えます。ナットという子どもは、ちょっと風変わりな子どもでお父さんとお母さんが亡くなっておばさんに養われているのですけれども、おばさんは、虫とかなんか大嫌いなのです。ところがこの子は昆虫とか爬虫類とかが大好きで、納屋を研究室にしてそういうものをどっさり飼っています。女性に多いのですけれども、そのおばさんも虫ぎらいなのです。ある時、おばさんが飼っていたオウムが亡くなってしまいます。おばさんはそのオウムをととても大事にしていたので死後、剥製を作る事にします。ナットは、剥製を自分で作りたいので、剥製の作り方を知るために、剥製になったオウムをバラバラにします。小さいときに目覚し時計を壊すと組み立てられないのと同じで、彼も組み立てられなくなります。そして実に奇妙な剥製ができてしまう場面は、いかにも生き生きした子どもが描けていてこれはなかなかおもしろかったです。皆さんにお奨めしますので、お暇な折りにはぜひ借りてお読みになって頂きたいと思えます。

こういった博物学的な知識は、当時、多くの人々の興味をひいたのでしょうか、純粋に子どものための冒険小説として書かれたものでなくても、同じ特徴を持つものがあります。1863 年にチャールズ・キングズリー(Kingsley Charles)が **Water babies** 『水の子』という小説を書いたのはご存知ですね。この人は、アングリカン・チャーチの牧師さんで、この作品はファンタジーの走りなのです。『水の子』は、非常に退屈で長々しい本なのですが、研究する上で読むとこんなにおもしろい本はありません。つまりどういう立場で読むかという問題なのですが、読書の楽しみという点から読むとこんなにつまらない本はないと思うのです。この本の魅力は、水の世界が実に見事に、美しく書いてあることです。ですから多くの年配の人が、私が「水の子はつまらない」と悪口を言うと「小さい時に読んで楽しかった」と言うのです。楽しいはずなのです。きれいなところだけとった本を読んでいるからです。この作品は、アメリカの悪口だとかカソリックの悪口なんかどっさり書いてあるから読んでいてウンザリします。長いです。この人は海辺とか川辺とか、水生植物、動物についての研究は、玄人裸足だったらしいです。彼はチャールズ・ダーウィンの生物進化論と聖書の宇宙観とを融合させようとして苦心惨憺して失敗した人なので、科学の知識もたくさん持っていた人です。この人は、**Glaucus ;The Wonders of the shore** 『クロウカス 海辺のふしぎ』1855 年に出しています。Everyman's library にも入っていますし、非常にたくさんの正確な挿絵がついているものです。磯などの博物誌で、これは純粋に大人向けに書いた本です。但し、ヴィクトリアの子どもたちは、これを随分に読んだという記録あります。そういった興味というのは、大人にも子どもにも 19 世紀半ば過ぎにもあったと思えます。ところがキングズリーという人は、大変な愛国主義者でありまして、ファンタジーだけでなく冒険小説も書いています。これも大人のものです。**Westward Ho!**『お

ーい、船は西行きだ!』Glaucus を書いた 1855 年に書いています。これは、何と訳せばよいのでしょうか『進路を西へ』とか『船は西へ』という感じでしょうか。海洋冒険口マンズとでもいえばいいのでしょうか、大人の小説です。(本を示して)表紙は、ピカピカ光っているのは金色でバックはちょっと濃い目の緑だったと思います。非常にきれいです。中は、びっしり英語が詰まっています。キングズリーという人は、非常に Passionate な人ではないかなと思います。この人の書いた本は、非常に迫力がある文体で、情感が豊かというのか、グイグイと我々を引っ張っていく迫力があります。読み始めると一気に読めてしまう。

デボン州の一人の青年がドレイク提督の船に乗って、世界一周をしてその時に捕らえたスペイン人にイギリス人の美しい娘をさらわれて、そしてそのスペイン人をずっと船で追跡していく。結局は、相手は溺死して復讐を果たします。本人も雷を受けて、盲目になって、最後には美女を得て、幸せな暮らしをするという絵に描いたような冒険のロマンスです。彼には、他にも **The Heroes** 『英雄たち』というギリシャ神話の再話もあります。これは、非常に格調の高い文体で見事なものだと思いました。後は、**Hereward the Wake** 『愛国者ヘリワード』というブリトン人の英雄を書いた話があります。これは、ほとんど叙事詩を読むような調子で書かれたものです。これも結構おもしろいです。『水の子』だけ読むのではなくて、読んでかなりおもしろい作家ではないだろうかと思います。どちらかと言うとこの人は、子どもの文学の中でファンタジーを取り上げた最初の人としてだけで終わってしまっている人ではないのです。

さて、少年向きの冒険小説の代表作といえば、ロバート・マイケル・バランタイン(Robert Michael Ballantyne)という人の **The Coral Island** 『サンゴ島』でしょう。バランタインは、スコットランド人で、当時非常に人気の高い人であったらしいです。長身でひげのあるハンサムな男に撮られている写真を見たことがあります。大変、人気者だったらしいです。おもしろいのは、ある時、スコットランドのエジンバラの公園で『宝島』を書いたロバート・ルイス・スティーブンソンが 15 歳の時に、公園で彼とすれ違ったときのエピソードです。スティーブンソンは、すぐに近寄って挨拶をして「あなたの作品の愛読者です」と言って、二人でお茶を飲んだというのです。いいじゃないですか、全国的に有名な人が 15 歳の少年とお茶を飲むなんて。今は、こういうことはあまりないと思います。人間そうでありたいなと思います。その位、当時の少年たちを夢中にした作品を書いた人だったのでしょう。

もっともこの『サンゴ島』という話は、1955 年、ゴールディングが『蠅の王』という作品でパロディしました。『サンゴ島』に書かれた理想の少年たちと理想主義は、全くのまやかしだということを書いています。そしてあのあたりからバランタイン熱というか 19 世紀的な冒険小説に対する幻想が壊されたというのですが、とうの昔にそうした幻想は、壊れてはいたのですけれども、確かに 19 世紀的な理想主義の皮を一枚剥いて見せたという気はします。『蠅の王』は、好き嫌いがあります。ああいう人間の見かたは、どうなのでしょう。

私もあれを読んで、あまり気持ちの良い話ではなかったなあという気がしました。好きな作品ではないのですけれども、ショッキングな作品で、児童文学の歴史の中では大きな事件になった作品だとは思いますが。

『サンゴ島』は、『サンゴ島の三少年』という翻訳で出版されたりしています。いくつか出たと思いますが『サンゴ島の三少年』というタイトルがつくことでわかるように、三少年の話です。ジャック・マーティン 18 歳、ラルフ・ローバー 15 歳、ピーターキン・ゲイ 14 歳という 3 人のイギリスの若者、これが船に乗って難破し、南太平洋の孤島に 3 人だけが生きて漂着します。そして、3 人だけの暮らしを始めます。前半はとても楽しいものです。椰子の葉茂る、一年中夏の物産の豊かなところで、若者が 3 人だけで暮らす。一番いいのは学校がないこと、両親がいないこと、そしてお金の心配がないこと。ある意味では理想的な暮らしです。彼らは、それを謳歌します。一人一人がみんな別な性格をもっています。

18 歳のジャック・マーティンは、イギリス的な指導者にふさわしく、背が高く肩幅が広く、非常にハンサムな顔で、決断力に富み、体力もあります。彼の体力が示される場面があります。ある時、2 隻の原住民の乗ったカヌーが追いつ追われつして島に来て、二つの種族の戦いが展開されます。逃げてきた方には、女性や子どもが乗っていました。そして追ってきた方には、戦士の男だけが乗っていて、そこで虐殺が始まる。その時に、ジャック・マーティンは、こん棒を使って、酋長と戦うのです。非常に体格のいい原住民の酋長を、彼は打ちのめしてしまう。つまり英雄になるわけです。代表的な 19 世紀イギリスの青年の一人です。ラルフ・ローバーは語り部で、彼は非常に思索的な、物静かな男で、観察者です。頭を使う男ですから、3 人いる中で物事をまとめたり、生き方の方向性を示したりと、いわば理想的な役割を果たす男です。ローバーという名前は、rove、彷徨う、放浪するという意味があるのです。一番下のピーターキン・ゲイは、非常に楽天主義者です。非常に明るくて、元気潑刺としていてそして衝動的な若者です。ですから思索者であるローバーが無人島で 3 人で暮らすことに絶望しかけた時に、このピーターキン・ゲイは、自分より一つ年上の若者に向かって「こんなにいいことはないじゃない、我々がこの島の支配者である、自分たちの国を作って、ここをイギリスの領土にして、原住民たちを支配して、マーティンは王様になる、お前さんは何々に、俺は参謀長になる」などと平気で言うのです。イギリスの当時の侵略主義の代表みたいなことを実に天真爛漫にいう若者です。彼らが有無合意通じながら、三人で一種の理想社会を作っていくわけです。

そしてこの話の背景には、ある考えが非常にはっきりと見てとれます。その考えとは、キリスト教精神を基礎にした白人社会、殊にイギリス人が指導者になって、原住民たちを指導し、豊かな国を作っていく、それが理想であるということです。そういう作品なのです。しかしそういった作品であるにも関わらず、片や観察者であるラルフ・ローバーは、その島の潮の満ち引きを毎日きちんと観察していたり、それから間歇的にある一定の時間をおいて、必ず潮が高く噴水のように噴き出す現象を見ると、なぜそれが起きるのかという原因を追求したり、それから透明度の高いサンゴ礁の島の海底で、ある一箇所にいつで

もそこに影があるが、なぜそこに影があるのだろうかというのを探求するという風に、様々な観察に基づく科学的な原因究明などを行っています。それだけではなく、島に打ち上げられ、美しい島を見ながら哲学的な考察をするわけです。自然の美というふうなものを見たりしているところがあって、長々とした考察の場面が作品に出てきたりしています。それこそ大英帝国の冒険小説の基本精神を書いた作品の中でも、博物学的な知識が入ってくるところにこういった作品の一つの特徴があるのではないかと思います。

けれども何といてもイギリスの19世紀的な冒険小説といえば、大英帝国を築いた侵略主義、その賛美、謳歌、それをさらに推進しようとしていった作品群が中心になります。私が今まで知識伝達や何かについてお話したのは、必ずしもそういったふうに評価される作品がみんなそればかりではない、色々な性質を持っているということを申し上げたかったからです。しかし中心は、帝国主義的な発展を土台にした作品だと思っています。そしてこれにも遠因と近因とがあるのではないかと思います。遠因の一つは、ナポレオンあたりにあるのではないのでしょうか。つまりナポレオンがヨーロッパを制覇して、ロシアで負けてやがて敗退する、ウオートルーの戦いがあったりして、イギリスにとっても重要な戦争でした。当然のことですが、ナポレオン戦争以後、ヨーロッパでは様々な形でナショナリズムが台頭します。グリム童話などもそうした民族精神の高揚、ドイツのナショナリズムの動きの中から出てきたものではないのでしょうか。ゲルマン民族あるいは、ドイツ人の精神の源泉を求めるといって昔話、わらべうた、神話や伝説そうしたものの研究が進んでいった。その一環としてグリム童話なども出てきたと思います。イギリスでは、スコットの歴史小説が生まれたのも同じ遠因だと思います。そして彼の文学の流れからアメリカでも歴史的な小説が出てくるのです。

アメリカで今でもよく読まれています。ジェイムズ・フェニモア・クーパー(James Fenimore Cooper)という作家が **Leather Stocking Tales** 『革脚絆物語』という5冊になる本を書いています。このシリーズは、一人の若者がアメリカ大陸の東から西へ西へと移って行って、最後は、草原で死ぬまでの物語です。これは読んでおもしろいシリーズですが、全5巻は、日本語では読めないかもしれません。代表的なのが『モヒカン族の最後』(1826)で映画になったりしています。ここに展示してあるのは、**The Deerslayer** という作品で、『鹿殺し』という意味なのですが、(本の表紙をさして)ここに持っているのは鉄砲なのです。鹿殺しの話ではなくて、この鉄砲の名前が鹿殺しなのです。この放浪する一人の若者の物語はアメリカ文学のロマン主義の代表作です。この作品は、マーク・トウェインが子ども時代に大変に愛読しています。『モヒカン族の最後』には、ネイティブ・アメリカンが非常に崇高な精神を持った優れた勇士として書かれていますので、それに憧れてマーク・トウェインは、西へ行きます。けれどもその時には、彼らは皆、居留地を盗られたりしてパツとしない姿をマーク・トウェインに見せます。マーク・トウェインは、それを見て非常に失望したということをして **Roughing it** 『苦難を偲んで』(1872)という小説で書いています。この『レザー・ストック・テールズ』は、単にアメリカだけではなくイギリスやド

イツでも大きな影響を与え、イギリスでもいわゆる西部物、インディアン物などがたくさんに輸入されたり、書かれたりしました。とにかく各国それぞれにナショナリズムが起っていった。殊にイギリスの場合は、植民地帝国を築いていったプロセスがあります。もちろんその原因には、ウェリントン公であるとかケベックの戦いとかイギリスの子どもたちを非常に刺激し、そして愛国心を駆り立てたいいくつかの戦争が 18 世紀にありました。

インド植民地を作っていく一番大きな原因になったのは、クライブで、18、9 世紀のことですが、19 世紀の始め、1815 年には大英帝国は、存在しませんでした。交易、貿易の形で西インド諸島から砂糖を輸入するということはやっていたわけです。しかし植民地と称するものはほとんどありませんでした。オーストラリアは、植民地、流刑地だったわけですが、当時、海岸地方にわずかに居留地があって、ほとんどが流刑地としての意識しか人々にはなかったと言われていています。そしてアフリカでも南端のケープ植民地にわずかな白人が住んでいたくらいです。カナダは、この当時 4 分の 3 が未探検でした。クライブが総督をしていたインドは、4 分の 3 はインドの王侯の支配地であってイギリスのものではなかったのです。ということですから、19 世紀の始めには大英帝国、植民地帝国というのは、存在しなかったといえましょう。それから徐々に広がっていくわけです。19 世紀一杯、戦争につぐ戦争、侵略につぐ侵略を続けて広がっていくわけです。イギリスは、最終的にはインドの 4 分の 3 以上を支配し、ビルマの全土を自分のものにし、それからアフリカもナイジェリアを中心にして非常に広大な地域を植民地化します。1837 年がヴィクトリア女王の即位の年で、1897 年に植民地会議をしたときには、その植民地が 4 倍に広がっていたそうです。1837 年から 97 年の間で、4 倍に広がっていた。19 世紀の終わりには、植民帝国ができていたということ、これがやはり冒険小説を盛んにする背景に当然なります。

愛国心の高揚や冒険心を広げる手段の一つは、やはりコミュニケーションとそれから運輸、つまり伝達手段の急速な発達があるでしょう。これは植民地帝国を築く上で、大きな働きをし、ひいては子どもの本の中に冒険小説が出てくる大きな原因にもなりました。鉄道とか汽船とかそれから電信とが発達して、情報が非常に早く集まるようになりました。新聞が大衆化したことも非常に大きな事で、イギリスの各植民地、あるいはイギリスと争っている所で起こっている出来事が非常に早くいわゆる一般大衆のものとして、知れ渡ること、つまりある意味では全国的な関心というものを高めていく大きな力になったわけです。私はイギリスの歴史をそれほど詳しく知っているわけではありませんけれど、当時のイギリス人のニュースに対する関心の高さは、さまざまな文献などでよくわかります。

1890 年にボーア戦争が起こって、ボーア戦争の最大のドラマティックな事件の一つは、マフェキングという割合と小さな町がボーア人に 200 日くらい包囲され、ついに解放されるという大事件だったらしいです。私は、アーサー・ランサム of 自叙伝を訳したことがあります。彼の初期の記録にそれが書いてあります。

私たちがウェリントン公の思い出のある 19 世紀から現代世界へとつき動かした歴史の急変、それは私の個人の日付によれば、ヴィクトリア女王の死、それからジェイムソンのトランスバール進入（セシルローズの部下のジェイムソンがイギリスの正規軍ではなくて私兵を使ってトランスバールに進入し、捕らえられた事件。結局ボーア戦争の引き金になった。これもまた大事件でイギリスにもすぐに伝わった。）マフェキング解放の夜のこと：二人の先生がデイリーメールの早版を覗き込んでいた光景から始まっている。私の 20 世紀というのは、そこから始まっている。

彼は、その当時パブリックスクールの生徒でした。侵略戦争上の大事件が、20 世紀の大事件で、20 世紀の幕開けになっていく。ランサムのような政治的な感覚の余りなかった男でもそういった記憶を持っているということは、多分これがイギリスのパブリックスクールの少年たち、あるいはそうでない少年たち関心の的だったと思うのです。ちょうど私の少年時代の南京が陥落やハワイ・マレー沖開戦をよく覚えているのと同じようなことだったでしょう。こうしたものが背景になって、こうした戦争を素材に物語を書いたら、子どもは、喜んで読んだらと思う。一番たくさん、おそらく 100 冊くらい書いたのは、ジョージ・アルフレッド・ヘンティ（George Alfred Henty）という人です。彼は 19 世紀末から 20 世紀にかけての作家です。（本を出して）ここに出ているのは ***On the Irrawaddy; a story of the first Burmese War*** 『最初のビルマ戦争』という本です。これなどは、彼の本を理解する上では、一番便利な本ではないかなという気がします。これはインドをほぼ掌握したイギリスが、国境を越えてビルマに侵入して、そしてビルマを支配に置く一番最初の戦争を書いた話です。当時、ビルマと言ったのは、今のミャンマーです。アジアでは、最強の軍隊を持っていた国だったようです。そこにイギリスの若者がスパイとして潜入するのです。彼は、変装したりなどして入り込むのですが、結局は捕まってしまう。そしてそこから逃亡して、その国境地帯の様々な要塞とか軍の配備とかそうしたものを知らせ、そこからビルマの戦争が始まっていく話です。ここで余分なことを言っておきます。

このヘンティの本は 2 冊読めばいい、後はみんな同じだとよく言われます。1 冊読むにはこの本なんかいいです。この人は、非常に長い間、従軍記者として戦地の報道に従事していました。新聞記者の書く文章は、短くなければいけないです。長々したものは電信で送れないから、みんな短くして送る。ですから新聞記者の書く文章は、歯切れが良くて簡潔明瞭です。中には、簡潔ではないのもありますが、普通そうだと思います。先程、申し上げたアーサー・ランサムも従軍記者であったことがあります。彼の文章もやはり新聞を書いていた影響が強いと思います。日本でも新聞記者で子どもの本を書いている人がいますね。そういう人の文章なんかもやっぱり確かに歯切れがいいです。歯切れが良ければ言いたいというものでもないのですけれども、読みやすいです。ヘンティの作品を読みますと、やはり従軍記者の文章ですね。読んでいて短い上にわかりやすい文章で、状況が実に目に

見えるように書いてあります。人間も地勢風土も。だから読んでいておもしろいですね。ですから侵略主義といった問題を考えずに、物語として読めば、読む人間は主人公になるではないですか。そんな立場で読んでいくと実におもしろいのです。ちょっと読んでみるといいなあと思います。彼の作品は、人物も何もパターンだといわれています。確かにそうパターンなのです。

しかしここで、また余分なことを申し上げますと、パターンでどこが悪いと言う場合があるではないですか。日本語でも例えば、那須正幹さんの『ズッコケシリーズ』は何十冊も出ています。ハチベエは、いつまでたってもハチベエで、それはサザエさんがいつまでたってもサザエさんで、カツオが成長しないのと同じです。寺村輝夫さんの『王様シリーズ』も同じです。子どもは、でも読みますよね。『ドリトル先生シリーズ』は、はっきり言うとうと月に行くまでがおもしろいです。後は、ガタガタ。作者の口フティングは、あれ以上書き続けなくなかったから月に飛ばしたのではないのでしょうか。しかし、皆が続きをと言うから、やむを得ず書いたのではと私は思います。でもやっぱり違うのです。シャーロキアンがよく言います。シャーロック・ホームズは、モリアティ教授と一緒に谷へ落ちて生還しますが、落ちた後とその前ではどこか違うと言う人がいますね。ところがシャーロキアンは、「何が違うんだ」といって夢中になって読むじゃないですか。ドリトル先生だって好きな人は、12巻きちんと読みますよね、文句も言わずに。そして楽しんでいる。皆、同じです。『赤毛のアン』の悪口なんて、言ってごらんなさい、大変なことになります。『赤毛のアン』は、1巻が一番よくて、後はつまらないと私は思うのですけれども「とんでもない、全部おもしろい」と言って、それどころかプリンス・エドワード島にまで行ってしまいます。読者にとっては、一冊ごとの出来の良し悪しではなく、安心できて楽しめる自分の世界があるのです。だから良い続き物は、おもしろいのです、いくらあっても。

ヘンティの作品は、40何冊かあって、全部並んだら見ただけでも圧巻です。装丁が非常に良い。これなんか(本を出しながら)『インド征服の物語』という副題がついています。シーク王、シーク族との戦いの話で、場所は、パンジャブ地方だと思います。本を開くと地図が実に正確に書いてあってよくわかります。コレクションでも40何冊揃っています。おそらく当時の子どもたちは、書かれた100冊近くの本が全部、並んでいたら夢中になって1冊1冊楽しんで読んだのではないかと思います。パターン化されたシリーズには、子どもを飽きさせないパターンと、飽きさせるパターンがあるのでないかと思います。

『ズッコケシリーズ』には、今の小学校や地域社会にはない理想社会があります。あれは大切なものだと思います。子どもに大きな安心感と勇気を与えるのではないかと思います。『水戸黄門』については、シリーズが終わると、体の具合が悪くなる年配者がいる話を新聞で読んだように思います。

イングラム・コレクションのヘンティの作品は子どもたちが非常に喜んで読んだのではないかと思います。しかし彼が書いた若者は、パターンなのです。戦場愛、友情、国旗と国家に対する強い忠誠心、勇気、事にあたっての決断力、みんな同じです。若者が戦争の

中で、勲（いさおし）を成し遂げるといふ話です。確かに侵略戦争謳歌の作品であるわけです。19世紀の終わりから20世紀の初めの子どもの読書層を大きく支配していた本であるわけです。第一次世界大戦の後、すっかり読まれなくなります。

同じような作品をずっと書いていった人たちがおります。Lieutenant colonel なので陸軍中佐フレデリック・サドラー・ブレアトン（Frederick Sadleir Brereton）という人の作品がコレクションに3冊あります。**The armoured-car scouts** 『装甲車偵察』というのは、新兵器です。非常に頑強でどこから攻められても絶対大丈夫なハリネズミのように機関銃が出ている装甲車で敵陣を突破していく話です。こういう話が嫌いでない人には、読んでいておもしろいです。この人は、自分の父親がいなくなったモンゴルへ青年が訪ねていく話 **Under the Chinese dragon** を書き、それから **The Great aeroplane** 『大型飛行機』というやはり新兵器の飛行機の話を書いています。これは20世紀の初めです。次に同じようなものを書いた作家にハーバート・ストラング（Herbert Strang）という人がおります。二人のジャーナリストがハーバート・ストラングという名前を作って書いた話で、本来は二人の人間の合作なのです。この人もやはりヘンティ流の作品を書き続けた人です。非常にたくさん書いています。代表作は、1916年、つまり第一次世界大戦が終わってからまもなくです。**Through the enemy's lines** を出しました。（本を出して）ピストルを持った軍人が出ていますが、「敵陣を超えて、または、敵の戦線を越えて、または、敵陣突破」とでも訳しますか、戦争物です。さすがにジャーナリストだけあって非常に読みやすく、そして過去の19世紀の作品の様々な欠点を知っているからそういう点を外して、本当に面白い本を書いています。侵略戦争云々だとかパターンだとか言わなければ、読んでいておもしろい作品だと思います。

パーシー・ウェスタマン（Percy F. Westerman）という人もおりまして、この人も非常にたくさんの新兵器の作品などを出した人でした。絵を見ただけで、大体わかります。（本を出して）**The nameless island** 『ネームレス アイランド』どぎつい赤ですよ、こういうのが好きな子どもは、表紙を見ただけで読みたくなるのではないかと思います。無人島にイギリスの青年がいて、そこへ原住民が押し寄せてくる、これは『新口ピンソン・クルソー』という名前がついている作品です。この人たちの作品は、みんな早く言えばヘンティの垂流です。この人たちの作品でおもしろいのは、やっぱり新兵器が次々に出てくるところで、突飛もない作品が出てくる興味があると思います。そのあたりが一種の魅力、セールスポイントになったのでしょう。大抵の研究書では、新兵器などは今まで書いたものの中で少なくとも読者を引き付けるための様々な工夫だと言っていますけれども、私は、必ずしもそれだけだと考える必要はないのではないかという気がしています。

実は1915年に全く冒険とは関係のない本で **The Jolly of book for boys & girls** 『少年少女のための愉快的な本』がアメリカで出版されました。（本を出して）とってもきれいなよくなできた表紙で、いかにも魅力的です。これは冒険小説では全くないのです。何かというと変な話、おかしい話ばかり集めたものです。つまり古典とか昔話などから滑稽なもの、

奇異なもの、グロテスクなもの、仰々しいもの、どんちゃん騒ぎの賑やかなもの、そういうものばかりを集めた本なのです。では二流、三流の変なものばかり集まっているかと言えば、そうではありません。シェークスピアからは、***Much ado about nothing?***『恋のから騒ぎ』。サッカレーからのものもあります。つまりきちんとした古典からかなりものを集めているのです。これを作ったオールコットという人は、前書きでおもしろいことを書いています。

『ガリバー旅行記』は、入れていない。なぜかというと『ガリバー旅行記』は、子どもたちに *Sense of Wonder* というか *Wonder story* を与えようとしているのだ。つまりこの本には、*Wonder* なものは入れない。『ガリバー旅行記』は、ファンタジーかどうかという疑問はあるが、あそこで出している *Wonder story* は、いわゆる *Fantasy* でいう *Sense of Wonder* とはちょっと違うのではないかと思う。

Wonder を抜いて、ユーモラスなものばかりを集めたという感覚、これがとってもおもしろいと思います。ですからこの本は、ぜひ子どもの本で殊に英米などをやる方はお読みになって下さるといいと思います。決して、易しい本ではありません。シェークスピアとかサッカレーが出てきますから。ディケンズの作品は、***The Pickwick papers*** から引いてあります。当然の選択でしょう。というようにかなり本格的なものが並んでいます。当時、ああいうものを読んで子どもがおもしろがったとすれば、子どもの水準って随分高かったなと思ったりしました。*Wonder* ではない奇異なものを集めるそういう本が出るという時代でもあったという気がしませんか。つまりブレアトンとかウェスタマンとかストラングとかが様々な珍奇な新兵器を出すという感覚、20世紀初めにはそういった感覚は、イギリス全体にあったのではないのでしょうか。

そういえば、アールヌーボーがそうですね、それに続いていくアール・デコもそうですね。当時の都会的な服装を見ますと、百年近く前なのに、今でも新鮮な感じがしますよね。もちろん着て歩いているのをみたわけではありません、挿絵などですけれども、とっても新鮮な感じがする。実際、着られたのでしょうか。体型とかコンビニエンスとか考えずに作ったのではないかと想像したりするのですが、20世紀初め頃は、新規なものを求めた時代だったのではないかという気がします。

私がわざわざ話の締めくくりにそういった話をあげたのは、子どもの本は、それぞれの時代というものの影響を非常に色濃く受けているということをお話したかったからです。イギリスの児童文学の冒険小説は、ほんのわずかご紹介した中でも、一番最初の頃は、ロビンソネイドであってもそれは、冒険よりもむしろ子どもたちの良い姿を書こうとしたものであったり、それから本当にイギリスの大英帝國的な冒険小説の ***Coral Island*** の中でも、やはり自然観察とか哲学的思考とかいったものを語っていたりする。そして植民地帝国真っ只中には、それが色濃く出る作品が出て、時代が20世紀に移ると、旧式の冒険小説を書きながらも時代の感覚を取り入れて移っていくのだといえます。

私が今、考えていますのは、冒険というのは連綿として、ずっと生き続けているということ。先程、お話しした目録の中に『はじめてのおつかい』が挙げられています。筒井頼子さん作、林 晶子さん絵の本ですが、この催し（展示会「未知の世界へ - 児童文学にえがかれた冒険 - 」）を紹介したある新聞に『はじめてのおつかい』を冒険の中に入れる感覚を誉めていました。冒険というのは、それこそ小さな日常の中にもたくさんあって今も生き続けているということでしょう。ファンタジーもフェアリーテイルも少女が書いた少女小説も日常を書いたものも子どもの文学は、それぞれの分野で生き続けています。

文化とか文学とかは、ある部分に光があたる瞬間があります。例えばイギリスの冒険小説といえば、何と言っても相手を侵略してゆくおもしろさを書いた 19 世紀の末のヘンティを中心にした帝国主義的な作品、そうしたものに光があたって、それがつまり児童文学の冒険小説の中心であって、それ以降は冒険小説は、だんだん衰退というか変化してきました。そして特に光が当たらなくなりました。今ですとハリー・ポッターを中心としたファンタジーに光が当たっています。ハリー・ポッターは、イギリスの作品ですが、広い世界に広がっている感じがします。イギリスはもちろんアメリカでも、色々な国で光があたっています。日本でも類似の作品が、非常にたくさん出ていますでしょう。柳の下にうんとどじょうがたくさんいる感じです。光が当たっている原因が、必ずあると思います。やはり児童文学を研究する人、あるいは興味を持った人は、楽しむだけではなくて、なぜああいう作品に今、光が当たるのかというそこを考えてみるとおもしろいと思います。

光が当たる原因には、文学的な現象だけではなくて、社会的な、時には政治的なといえますか、子どもと大人の両方を大きく動かしていく共通した心理状況があるように思います。私の口癖といっても他の本からの引用なのですが、ある本で「ファンタジーが衰退する時は、人々が神を見失った時だ」という言葉をアリソン・ルアリーでしたかが言っています。

19 世紀のイギリスの児童文学にはすぐれたファンタジーが非常にたくさん出ました。ハンプリー・カーペンターは、その現象を一種の擬似宗教行為、つまり神を見失った人々がフェアリーとフェアリーテイルに神の代替物を求めたのだという説をたてました。19 世紀後半に、たくさんのファンタジー作品が生まれて、多くの人に楽しまれ、中には今も光を放っている作品がある。そういう作品を生み出したのには、単に児童文学が盛んになったからではなくて、世の中全体を動かしていく力があったからだだと思います。こうした力が働かなければ公共の公園の片隅にピーターパンの銅像は建たなかったと思います。

1925 年にパーシー・フィッツヒュー（Percy Fitzhugh）という人が、*Westy martin in the Rockies* 『ロッキー山脈のウエスティ・マーティン』という作品を書きました。この本は、コレクションにありますから読めます。非常に読みやすい本です。アメリカの本です。これを書いた人が、前書きか何かでおもしろいことを言っています。

1925 年、今日では子どもの文学としては、（冒険小説は）あまり読まれないだろう。要す

るに大げさで誇張されすぎているとみなすだろう。そして今のアメリカンフットボール、野球、寄宿学校、土曜日のピクニックの時代に、アメリカの大西部を扱った冒険小説などは仰々しい作品として子どもはもう読まないだろう。

と言いながら書いているのです。当時のアメリカでよく読まれていた作品は、ロフティングです。1920年代です。イギリスですとプーさんの時代です、それからエリナ・ファージョンの時代で、冒険というのはパツとしない時代だったと考えられています。フィッツヒューは、時代が変われば衰退するだろうと言っていますが、実にたくさんの作品が今も出版され、イングラム・コレクションの中にもアメリカの1950、60年代の冒険小説も大量にあります。ほとんどが読み物です。でも大衆的な読み物を読むということは、研究上とても大切なことです。文学史的に読みますと頂点だけ読んで理解するでしょう。そうではなくてその下に何があるかということ意識して読まないとい歴史は見えて来ません。現在も、イギリスでもアメリカでも日本でも、冒険小説は書かれています。私たちが常に覚えておかなければいけないのは、あらゆる文化、文学には必ず光が当たったり当たらなかったりする所があるということです。小さく当たるときもあるし、大きく当たる時もあります。

今、日本で大きな光が当たっているのは、女性が書いたファンタジーでしょう。荻原規子（おぎわら のりこ）さんとか上橋菜穂子（うえはし なほこ）さん、たつみや章（たつみや しょう）さんたちの諸作です。皆さん本格的な作品を発表されています。

さらにまた余分なことを申し上げますと、いろんな作品がありますが、良い冒険小説と悪い冒険小説の見分け方があると思います。子どもに良い冒険小説とは、着想に独創性があること、それから スリルやサスペンスがふさわしく割り当てられていて、話の組み立てが巧みなこと、つまりプロットが巧みなこと、そして何と言っても 表現力がある文章であること、それから 人物が活きた存在として登場していること、それから 冒険心を含めて、想像力を刺激する何かが含まれていること、そしてこれは解釈が難しいのですが 本能的な正義感があること。これは、人によって違いますよね。だから自分のセンスを使ってこれが正義だと思えることがちゃんと書いてあること、このような条件がおそらく良い冒険小説の条件になるのではないかと私は考えています。ご清聴ありがとうございました。

（じんぐう てるお）

参照文献 オックスフォード世界児童文学百科